

第五章 御国が来ますように

経験の教えるところであるが、われわれは、善をなすにあたつて、また神の国に入るにあつて、「主よ、主よ」と唱える必要はない。工場で、またスラムで働いてみて、われわれは、全く無私で、他人のために尽くしながら、それでいて「主よ、主よ」などと口にしない人びとの例を見出したのである。こうした人びとは、時に自分の仕事を棒に振り、家族に苦しい思いをさせ、自分自身を犠牲にしながら、すべての善なるものを守り、優先させようとする。福音は彼らの中にあり、聖霊なる神が働いている。

人が判断されるのは、その人となり、またその人の行いによつてであり、その人がどんな会社や組織に属し、どんな主義主張を唱えるかによつてではない。われわれは誰もがこのように判断するように勧める。そうすれば預言者アモスの発したことばも、容易に理解され得るであらう。アモスは、イスラエルの民がヤハウェによつて特別に選ばれたとする思想を否定し、救いをもたらすものは唯一、正義のおこないであると教えたのである。

そうすると、われわれにも、われわれの戦い、われわれの信仰の何たるかが見えてくる。われわれは、神の国を築きつつあるのである。ここでいう「われわれ」には働く聖職者と、われわれと共に戦う人びとすべてが含まれる。われわれは、人と人を分離しない。われわれは、自分たちがより良いものだとは思わない。われわれは、みな平等のもとに働いている。

神の国の建設のために戦う人はみな、やがてその地に住まうことになる。そこには特典もなければ、特権もなかる。正義は、行いや働きを基盤とするものである。理論や教義をもとに判断を保留する者は、自分自身を罪に定めているのである。理論や教義の名において平等を拒否する者、あるいは自分たちは先祖から受け継いだものによって救われると考える者は、神の国に受け入れてはもらえないであろう。

神の国の住人たちは、家を建て、そこに住む。そして木を植え、彼らの労働の実りを味わうのである。

サンパウロ市、サンタ・マルガリータ基礎共同体「カトリック労働者連盟の手紙」

SEDOC II (1978) 362—63.

「御国が来ますように」という祈りのことばによって、われわれは主の祈りの核心部に到達する。と同時にわれわれは、イエスの究極の意思と対面する。なぜなら神の国の宣言は、イエス

のメッセージの最も重要な事であり、イエスの行いの第一の動機だからである。われわれの不安と希望の最深部へと達しているこの祈り「御国が来ますように」を完全に理解するために、われわれは少し離れて、深く掘り下げて考えることから始めなければならない。そうした努力を通してのみ、この祈りに込められた新しさと過激さが理解されるのである。

最も気高く、最も深遠な人間の本性

人間と動物を隔て、区別しているものは、知性ではなく、むしろ想像力である。⁽⁶⁴⁾ 動物の生は、ごく身近な周囲、環境によって規制される。動物の生は、まわりの世界を反映しているにすぎないのである。人間のみが、現実の世界を解釈し、それに何かを付け加え、歴史と世界の事象を象徴的に見、想像を加えて見ることができる。それゆえに人間は、なんらかの具体的な行為や活動によって弱められない欲求によって動かされている。それは世界との関係、他者との関係、また自分自身との関係において、常に開かれているということである。そして人間は、絶対者としての神、愛である神、あらゆる欲求を満たす意味としての神に向かう時にのみ調和を見出すのである。

人間というのは正確に言えば、「在る」存在ではなく、「成る」存在である。この自己刷新の能力を持っているということは、何かの目標にたどりついたところから、また新しい何かが始まるということであり、別な言い方をするなら、その到達点もより広大な視野から見るとは、もはや、ただ一つの要素としてしか見えなくなることである。現時点における現実には、単に、これから来たる別のものを予期するものでしかない。人間であればこそ、眠っている時のみならず、目をさましている間も、夢を見ることが出来る。われわれは、人間同士の関係がつねに平等である新しい世界を、すなわち新しい天地を夢想する。人間だけがユートピアを心に描くことができるのである。このユートピアは、それによって現在の矛盾から目をそらそうとする逃避のための道具ではない。それは人間の生の一部をなすものである。人間は絶えず未来を企画し、夢を思い描き、約束を頼りとして生き、希望を心の糧とする存在だからである。ユートピアを思い描くことで、不合理や愚かしさが歴史を支配しようとするのを防止し、この世に埋め込まれた安全組織を武装解除させる。そして現在を、約束された未来に向かって大きく開放する。

人類学者たちは、われわれは「希望原理」なるものの中に住まっていると語る。⁽⁶⁵⁾それは緊張という形、絶えず新しいものを求めるといふ形、辺境や未開拓分野のない世界という形、現実の姿に対する疑問の形、そして期待の形、明日の形、よりよい生活を夢見る形で現われ、苦し

みも悲しみも涙も死もない世界の形で——なぜならこれらはすべて過ぎ去ったからである（黙二一4）——また、新しい人間性を希望する形で現われる。この希望原理にこそ、われわれは人間の最も深いところにある、最も根源的なもの、決して消滅することのない本性を見る。現在あるものだけが消滅する。しかし、まだ存在しないものは、失くなりようがないのである。希望は未だ存在しないものに向けられるが、それは熱望の中に存在しており、心の憧れによって予期されている。

人類の全ての文化は、最も原始的な様態のものから、最も洗練され高度なものまで、それぞれのユートピアを持つ。そしてそれが、あらゆる希望の母体となっている。ユダヤ・キリスト教文化の場合、そのユートピアとは、現世界の変革であり、ここに含まれるあらゆる関係の転換である。われわれは自然界の調和、和解について書かれているのを見る。「狼は小羊と共に宿り……獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、そして……わたしの聖なる山においては、何ものも害を加えず、滅ぼすこともない」（イザ一六〇9）と。神は新しい心と新しい大地を創造される。「そのとき、人びとは隣人どうし、兄弟どうし、『主を知れ』と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを（神を）知るからである」（エレ三一34）。そして「彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく」自然はもはや悪意ある存在ではない（黙七16）。メシアの時代とは、こうしたユートピアが現実のもの

のとなった時のことである。「その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねない」(ヨハ一六23)。なぜなら神は、心の中に絶えることなく湧き出す疑問のすべてにお答えになるからである。

こうした希望は、この世の矛盾が深ければ深いほど、そしてその姿が無慈悲、残酷であればあるほど、熱く激しく燃えさかる。「人間は不義によって真理の働きを妨げ」(ロマ一18)、「神の真理を偽りに替え……あらゆる不義、悪、むさぼり、悪意に満ち、そしてねたみ、殺意、不和、欺き、邪念にあふれ、陰口を言い、人をそしり、神を憎み、人を侮り、高慢であり、大言を吐く……」(ロマ一25、29-30)。貧しい者が搾取され、弱者が獣のような仕打ちを受け、正直者があざけられ、不正義と罪を構造的にかかえ込んだ歴史があらゆる人間を抑圧する。

こうした状況は明らかに、神の権威に背を向け、神の意志をないがしろにするものである。神は創造主ではないというのであるのか？ 神の目を盗み、神の力を回避し得る場がどこにあるというのであろうか？ 神の命令に従わないなどということがあり得ようか？ 多くの預言者が、希望の灯を消してはならないと訴えている。いつの日にか必ず、神はこの世の矛盾に介入され、すべてを元の良きもの、良き状態に復される。そして過去において一度も夢見られなかった完璧な世界が実現される、と。旧約聖書はこのことを繰り返し述べている。「主は代々限りなく統べ治められる」(出一五18)。「わたしは主、これこそ、とこしえにわたしの名」(出

三15)。「そのときあなたは、わたしの名が主であることを知る」(イザ四九23、エレ一六21、そしてエゼキエル書に五四回)。これらはすべて、衝突や矛盾が基本的に変化しない状況にあって、希望を育て、支える約束である。そしてこの約束から明らかに、天に向かって発せられる叫びに神が無関心ではないこと、神はここにいて、やがてその統治のさまを明らかにすることが、読み取れる。

旧約聖書時代のある時期、神の支配、統治はイスラエルの王の支配、統治として明らかにされる(サム下七12~16)と考えられた。イスラエルの王が貧しい者に正義をもたらし、寡婦の権利を回復させ、みなし子を守り、かくして不正義に満ちたこの世を解放するのだ、と。しかしほどなく、権力の腐敗が明らかとなる。「神の子」(詩二7、サム下七14)の名のもとに神を代表する者であったはずの王たちが、一〇部族の人びとによって「ダビデの家にわれわれの受け継ぐ分が少しでもあろうか」(王上一二16)と問いただされる状況が生じたのである。王たちは墮落し、そして去っていった。

旧約聖書の歴史上、別の時期に、神は正規の神殿礼拝を通じて世界を変革なさると考えられた。そこには祭司の定め、供犠があり、聖別の規定があった。神はこの神殿から統治をおこなわれる。ここで人びとは、顔と顔を合わせるようにして神と出会うことになる(エゼ四〇~四三参照)。しかし預言者たちは、回心のない、また友愛や慈悲心を欠いた礼拝など全くの幻想

であり、意味はないと批判した（アモ五21〜24）。その望まれる礼拝は、正義であり、虐げられた者たちの解放である（イザ一17）。生きている神は、礼拝の対象とされる形だけの神ではなく、邪惡をしりぞけ、正義を喜ぶ、倫理的な神なのである。

また、イエスの時代に広い支持を得ていた別の集団は、宇宙の調和を默示的な意味において求め、希望した。（聖書には「ダニエル書」「ヨハネの黙示録」と二つの黙示書が記載されているが）「黙示」とは、神の啓示による教えのことである。これらの黙示録は秘められた知恵を求め、これに近づく者は新しい天地の到来によって宇宙の変革を予期する時の徴を解釈することによってのみ、この黙示にふれることができた。この大変革は一気におこなわれ、あらゆる関係を逆転させるものであった。すなわち不幸な者は幸せに、幸せな者は不幸になり、富者は貧者に、貧者は富者になり、打ち棄てられた者には名誉が与えられ、名誉ある者には軽侮が与えられる……。この急激な変容と共にこの世の終末が訪れ、新しい天地が始まる。

黙示においては、神の国はひとりで来ると期待されたのに対し、熱狂主義者たちの集団のひとつ、〈熱心党〉は暴力や力を使っても神の国の到来を促進すべきだと主張した。他の者たち、あまりに敬虔であったパリサイ派は神の法を厳格に守ることによって、この世界変革の時の到来を早めることができると思った。彼らは全てのことを強迫神経症的に守り、ついには、弱者を抑圧してまで強制するようになった。絶对的に敬虔であることを求め、これが達成され

れば、神の約束が実現される条件が整うと考えたのである。

しかしこれらすべては無駄であった。神に向けて発せられた嘆願は、御国が来ますように！であり、時が満ちますように！であり、預言者たちは全幅の信頼をもって預言した。「主の日は来る」(ヨエ四11-15、イザ六三4、マラ三19-24)。

「あなたがたの見ているものを見る目は幸いだ」(ルカ一〇23)

われわれは、希望と不安が入りまじった心を抱きつつ、ナザレのイエスの次の声を聞く。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マコ一15)。これはもはやイエス以前の預言者たちの語った「神の王国は来るであらう！」⁽⁶⁶⁾のような単なる約束ではない。そうではなくイエスは、神の国はすでに、すぐそこまで来ている、と語っているのである。

神の国が実際すでに存在しているという紛れのないしは、「目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、らい病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている」(ルカ七22)というところに既に実現している。イエスはこうしたことをすべて実現し、洗礼者ヨハネにそれを伝えた(ルカ七18-23)。

預言者イザヤはこれらのしるしを預言した（イザ六一1〜2）。イエスはその言葉を特別に受けたものとして「この聖書のことばは、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（ルカ四21）と説明した。

神の国——これは、イエスによって宣言された希望と喜びのメッセージである。このことばは、旧約聖書に頻繁に登場するわけではない（詩二二29、四五7、一〇三19、一四五11、代上二九11、ダニ二44、四34、五26参照）。それでもこのことばは、（アラム語で *maluta* として）イエスのメッセージの言葉の母体を成している。「神の国」といつても、こゝでは「領土」という意味ではなく、現在この世にある神の力、古いものを新しいものに変革し、不正義を正義に、そして病いを健康に変え得る神の權威を指すのである。

さて、その王国の内容を言い表わす際、イエスはその要素を規定する。⁽⁶⁷⁾言おうとすることを疑いのない比喻を用いて語る。神の国はある程度までたやすく理解される。しかしそれは同時に隠されており、望まれる存在である。たとえば地中に埋もれた宝物のようなものである。あるだけの家財を売り払ってその土地を購入する者があれば、その地中の宝がそうである（マタ一三44）。それはまた、商人が自分の持ち物をすっかり売り払い、やっと手に入れるほど高価この上ない真珠のようなものであり（前掲一三45）、播けばやがて大きく成長し、鳥がやってきて巢を作る木になる、ちっぽけな種のようなものであり（前掲一三31、マコ四26〜32）、

そしてそれは、すべてのものの姿を変える大きな力なのである（マタ一三33）。最も頻繁に用いられたのは天の国、あるいは神の国、という表現形式である。その場所です。

びとは、坐り、食べ、飲み（ルカ二二30、マタ八11）、主が、宴席に加わるようにとおすすめる（マタ二二14）。ある者は入り、他の者は追い払われる（前掲五20、七21、一八3、一九17、二3、二五21、23）。そこに入るための鍵が存在し（前掲一六19）、そこに住む者は、「御国に入るように生まれた」者である（前掲八12）。そこはまた、住む所がたくさんあり（ヨハ一四2）、誰もが、つまり召し使いであらうと、障害を持つ者であらうと、社会からはみ出たような者であらうとすべて、この家、この食事に招じ入れられる（マタ二二10）。東や西から大勢の人が来て宴会の席につく（前掲八11）。正しい人々はその父の国で太陽のように輝く（前掲一三43）。あれこれのイメージからわれわれは、必ず果たされる絶対的な意味の前に立ち、そして被造物と人類が、この地点に到達したことを感得するのである。

イエスの説く神の国には、忘れてはならない三つの特徴がある。その第一は、神の国は世界的であり、普遍的であるということである。ここにはすべてが包含されており、病氣や貧困、死という根源的な不幸の次元に解放がもたらされる。そして人間関係を再構成して、憎しみがなく、友愛に満ちたものとする。神との間にも新しい関係が始まる。神は、彼の愛することもたちの全ての父なのである。神の国は、この世のいかなる存在、現象にも還元されない。宗教

的側面でさえも例外ではない。イエスは、政治的なもの、宗教的なもの、あるいは奇跡的現象、といった現実世界の何らかの特定の局面に神の国を還元しようとするいかなる誘惑も悪魔的なものとみなしている（マタ四11-11）。

第二の特徴は、神の国は構造的であるということである。それは全てのものを包含するだけでなく、完全な構造的変革をも意味するものである。それは、現実の外側に修正を加えるのではなく、その根源に達して完全な自由をもたらすのである。

第三に、神の国は、決定的なものなのだということである。この世界は普遍的であり、構造的であるために、神の国はこの世の終わりを示している。この国は、神の究極の意志を明らかにする。われわれが現在生きて、苦しんでいるこの世界は、やがて終りを告げる。そのあとには、新しい天と新しい地が出現し、そこでは正義と平和、そして全ての天の息子と娘たちの間には一致が生じ、父の偉大なる国でついに勝利するのである。われわれはここで、「あなたがたの見ているものを見る目は幸いだ」（ルカ一〇23）というイエスの感嘆を確かに理解することができる。

人間の希望の中でも最も古くからある希望は、もう実現され始めている。ユートピアはもはや、夢の中のことでもなければ、将来のことでもない。具体的に晴れやか、光に包まれた歴史となりつつある。神の国はすでに、われわれの間にあるのである（ルカ一七20-21）。そして

現実のもののすべてに影響をおよぼし、すべてを完全な方向へと動かしつつある。「神による終末の時、神の勝利の時、世界の完成の時」は、もう間近である。本(68)当にすぐそこまで来ているのである。神の国とは、過程である(68)と理解されなければならない。それはすでに、姿を現わしつつある。イエスという人そのものにおいて、イエスのことばや、イエスの自由を得させるための行いの中に、現実の形をとりつつある。そして同時に神の国は、その絶対的な充満が最終的に到来する明日に向かって開かれている。我々はそれに備えなければならない。誰もが自動的にその王国に入れるわけではないからである。悔い改めなければならない。こうしたことからイエスが述べた回心の勧めが理解されるのである。

神の国は、サタンの国に對置されるものとして、また現実に存在する惡魔的な構造の對極にあるものとして、建設される。それゆえに各種の衝突は不可避であり、危機も完全に避けて通るというわけにはいかない。われわれには早急に決断を下すことが求められている。その最大の目標は貧困である。貧しい人びとの間にこそ、新しい秩序が具現化されるのである。その理由は、貧しい人間の品行の如何によらず、単に彼らが貧しく、その上飢えや不正や抑圧の犠牲者の立場にあるからである。イエスは、その王国によって、彼らの虐げられた状況に終止符を打ちたいと望んでいる。その国は貧しい人びとを抜きにしては実現されない。神の国は、貧困に打ち勝ち、貧困の向こう側の世界であり、貧困とは無縁の場所なのである。(69)

この文派においてわれわれは「御国が来ますように」という祈りのことばを理解できる。この祈りのことばは、その前の「御名が崇められますように」という嘆願を補完するものである。神が、創造の中の反逆的部分のすべてを屈服させた時、すなわちあらゆる存在を幸せな結末に至らせることができた時、神の国は完成されるのであり、神の御名は代々にわたって賛美されるであろう。これらはすべて、今、進行中である。神の国とは、喜びに満ちた状態であり、現時点において祝われてもいるが、同時にそれは、将来において実現されるはずの約束でもある。これは、贈り物であり、課せられた使命でもある。そして、希望の終着点でもある。オリゲネスはそれを適切に表現している。「神の国はわれわれのただ中にある。われわれが『御国が来ますように』と祈るとき、われわれは明らかに、神の国の成長を祈り、それが実を結び、そして完全に熟するようにと祈っているのである」と。⁽⁷⁰⁾

神の国は近づいている

神の国は、イエスの生涯と復活によって間違いなく招来された。イエスを通じて新しい人類が誕生し、人間同士の間に、そして人間と世界との間に聖なる関係が生まれ、彼が復活した肉

体において変容したように物体の宿命に対する啓示がなされた。しかし世界はなお、矛盾と暴力のうちにある。今なお、悪魔が支配権を握っているのである。悪魔はイエスを消し去り、平和と共同と正義の国を建てることにかかわっている多勢の人々を十字架につけ続けている。ここで思い出されるのは、イエスであり、創造の絶対的意味をになう者が拒絶されたという事実である。

神はご自分の仕事の終着点をお示しになった。その目的地は、神の国である。ここは究極の、歴史を超越した目的地であり、神は人間の拒否にもかかわらず成就されようとしている。これはちやうどたとえ話の種のようなものである。「人が……夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない」(マコ四26、27)。人間の拒絶も、十字架も罪も、神にとって克服できない障害ではない。王国の敵でさえも、王国に役立つ、王国に奉仕する存在となる。イエスを殺した者たちが、人間の贖いの役に立ったように。これらはすべて、神のはからいによるものである。

心の硬化した人間によるイエス・キリストの排斥、拒否の態度は、この世に各種の「歴史的可能性」が存在することを示している。最後の目的地に通じる道は、決して一つではない。相互に矛盾して見え、多様な道が存在する。歴史は、運命によって方向を定められるわけでもない。ければ、一つのタイプの行為によって、あるいは一つのタイプの展開によって、決定されるも

のでもない。マルクスは、彼の生涯の老年期にあたる一八八一年、次のことを認めるにいたった。すなわち、われわれは歴史上のある一時期で実践された可能性や領域分野——それは一つの意味のみを許容するのではなく、各種の意味や認識の連なりを含むものである——を構成する可能性の理論を手になしに、歴史の原理に関する理論、必然に関わる理論を見出すことはできない、と⁽⁷⁾。かくして、つねに多様な道、多岐にわたる選択肢が存在するというわけである。

キリストの十字架受難は、個人にしる集団の場合にしる、人間が創造の究極の意味に遭遇したとき、いかにうるたえ、不安を持つものであるかを、明白に示している。しかし神の力は偉大であり、神の慈悲は無限である。人間のこの不安を、神の国実現のための一つの道に変えてしまうのである。創造そのものは、全体として決して頓挫することはない。なぜなら最後に勝利し、支配者となるのは、神だからである。

かくして万物には、歴史を超越した目的が存在し、保証されている。そしてこれが、神の終末的王国と称されるものである。他方、これと混在する形で、歴史内部の不合理、愚かしさ、つまり拒絶や否定を許容する歴史的可能性が存在している。しかしこうした存在といえども、至福に満ちた究極の世界を挫折させることはできないのである。

神の国を信じることは、歴史の最後の、至福に満ちた意味を信じるということである。そし

てそれは、ユートピアが、重みのある事実以上に現実的な存在であると確信することであり、世界や人間存在に関わる真実を、過去また現在において、完全に見出そうとするのではなく、それが一〇〇パーセント明らかにされるであろう未来に求め、設定しようとする事なのである。「御国が来ますように」と祈るということは、心の中の最も根源的な希望を揺り動かし、これを活性化させるということである。そうすることによって、現在、個人と社会とを問わず、人びとの頭上に容赦なく振りおろされている蛮行、不合理に屈服することなく、これを退けることが可能となるのである。

神の国はいかなる形で到来するのであろうか？ 神の国の到来を告げ知らせる一つの証し、特にキリスト信仰の立場から見えて絶対に見逃されるはずのない一つの基準がある。それは、貧しい人びとに福音がおとづれた時、すなわち貧しい人びと、抑圧された人びと、虐げられた人びとのところに、正義の光が届いた時、である。友情の、調和の、そして参加の帯が結び合わされ、万人の不可侵の尊厳が確立されさえすれば、神の国の扉は簡単に開き始めるのであり、人が人を搾取する社会構造が改められ、主人と奴隷の関係を容認する社会がなくなり、公平な取引を保証する社会が誕生すればいつでも、神の国は、夜明けの太陽が昇るように、輝やかしい光とともにほじまるのである。

聖アウグスティヌスは、主の祈りの注解の中で、「かくして、御国が来ますように！」と祈

りながら、あなた方が求めているのは、神の恩恵により正しく生きられるように、ということである⁽⁷²⁾と書いている。この世で、生きるべき形に則って人びとが生きる時、神の国は待望され、その到来が促進され、そして歴史の中で具体化されるのである。「正しく生きる」には、多くの我慢や断念が必要であるし、自らの具体的生活において責任ある関与が要求される。時には殉教さえ覚悟しなければならない。テルトゥリアヌスは主の祈りの中の「御国が来ますように」という嘆願について、次のような注解を残している。「祭壇の下に殉教者たちの魂が、神に向かって大声で叫んでいる」。その叫びは「真実で聖なる主よ、いつまで裁きを行わず、地に住む者にわたしたちの血の復讐をなさらないのですか」(黙六10)という内容のものである。しかしテルトゥリアヌスは続いて、「代々の末に正義が獲得されるのである。主よ、御国の到来を早めてください⁽⁷³⁾」と述べている。

われわれは、「御国が来ますように！」というこの嘆願に値する存在にならなければならない。イエスに従って行く時、われわれはイエスの無限の希望に対して信頼を増していくと同時に、実際の生活で紆余曲折を経ながらも、この希望を具体化しているのである。エルサレムの聖キュリロスは、われわれに良い忠告を与えている。「自らの行い、思い、そしてことばを清く保つ者は、御国が来ますように！と祈ることができる⁽⁷⁴⁾」と。

「御国が来ますように」という嘆願は、最も根源的な希望から立ちのぼる叫びである。この希

望はしばしば矛盾しているように見える。しかし何があっても決して放棄されることのない希望的意味の顕示を求めるのであるから。このように祈る者は、「強い人」(マコ三27)よりも強地を発足させる力を持つお方——その新しい世界においては、人びとは皆和解し、仲むつまじく生き、すべてが平穩である——を確信を持つて選び取るのである。われわれは「御国が来ますように」という祈願が聞き届けられているがゆえに、この約束に対して感謝を捧げるといえます。大いなる力を振るって統治されたからです」(黙一一17)。